



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

「ナルマダー河の子供たち」③

ガート（船着き場）を上がると、凹型の施設に着いた。中庭のイスに腰を下ろすと、熱いチャイがふるまわれた。対岸の灯りが細く浮かび上がっている。

（やっと、着いた）

そろそろ小さい影たちの正体を明かしておかなければならない。施設で暮らす 15 名の子どもたちである。両親家族がいる子どももいる。両親が出稼ぎ中なので預けられている子もいる。さまざまな事情で預けられ共同生活をしている。だから、孤児院というわけでもない。スワミー（お坊さま）が運営しているので“寺子屋”という概念が近いかもしれないが教育を受けているのではない。すぐ上に学校があり、そこに通学している。共同で勉強しているが“塾”でもない。

彼らの義務は、朝夕の祈りと掃除皿洗い程度のことである。炊事はスワミーと一人のOB青年が担当している。お祈りのときは白衣に着かえる。それが可愛くもあり清々しくもある。

われらも早速夕べの祈りに加わった。

年長の子どもが祭司役をする。スワミーがハーモニアム（箱型のオルガン）を演奏する。年少の子どもがマンジューラー（小型の合わせシンバル）やカルタール（木枠のがらがら楽器）で伴奏する。

ところが、最年少の子どもたちは眠い。それでリズムが合わない。

「なにをやっているのだ。しっかり伴奏しなさい！」

スワミーが祈りの演奏を中断して子どもたちを叱る。子どもたちに緊張感が漂い演奏が再開される。それもしばらくの緊張感で、長くは続かない。

見ると、最年少の子ども二人（ガガンとラジュ）が、こっそりと指で突きあっている。ケンカあるいはイジメかと思ったが、仲良し同士がじゃれ合っているようだ。何とも微笑ましいシーンである。

（この子たちとなら、楽しくやっていけそうだ・・・）

子どもたちは、わが輩のことをアングルと呼ぶ。

「アングル、一緒に泳ごうよ！」

アングルとはおじさんの意味である。

（バーバー・ジーでなくて良かった）

バーバーは婆さんではなく爺さんのことである。ジーは尊称の“様”である。

子どもたちが学校から帰って来て、まず行うことは“沐浴”という水遊びである。年少組はフルチンだ。

（懐かしい！わが輩も村にいた幼少のころはフルチンだった。）

次々に河に飛び込んでいく。犬かき泳ぎだが、脚をまげて泳ぐため前に進めない。泳ぎ方を知らな

いが、実に楽しそうだ。

わが輩も恐る恐る身を沈めたものの、スッテン転び、ゴボゴボ水没、水飲む始末。

雪とけて村いっぱいの子どもかな 一茶

一茶は子供たちと遊ぶことを好んだと云われている。悟り、仏性とは何か、と考えるより子どもの無邪気な遊び姿を見るとよい。もちろん、子ども心は悟りと等しいなどとは言わない。子どもにも“純粋な邪心”があるからである。

夜にファッション・ショーが始まった。

わが輩は現地に着くまで、恥ずかしながら他のメンバーが子どもたちの衣服を持参したとは知らなかった。しかも、それは古着ではない。既製品でもない。何と一枚一枚夜なべをして縫製した衣服であった。

ところが、どうだ。わが輩は余りものの数本の色鉛筆しか持ってこなかった。

スワミーが各々にマッチする衣服を分け与えはじめた。

「すぐに着るんじゃないぞ。お祭りのときに身に着けるんだよ」

ガガンたち最年少の子どもがそんな忠告を聞くはずもない。早速身につけて大はしゃぎである。見ると、スワミーは子どもたちを叩いている。誤解してもらっては困るが体罰や虐待ではない。あれが欲しい、これが欲しいという子どもを諫めているのである。

ガガンは最初に入所したとき、筆記用具のチョークを食べ物だと思い口に入れた。チョークは食べものではない、と教えるのに時間を要した。貧しさは、悲しいものだ。決して「貧しき者は幸い」ではない。

われらが去ったあと、彼は貧しい実家に帰り、再び戻ってこなかった。

ガガンとラジュの戯れごとは、わが輩の目からすると微笑ましかったが、ガガンにしてみれば“好まない戯れごと”だったのか、と思いつけている。

ここにいれば、教育も受けられる。水泳もできる。豪勢ではないが、満足な食事もできる。それよりも親への思慕が勝ったのだろうか。

わがメンバーが持参した衣服を、何度も何度も着たり脱いだりして、われらに見せにきたガガンは、服よりも親への思慕を選んだのだろうか。

ガガンよ。今、おまえは村でどうしているのか。

もう一度、わが輩のことを“アンクル”と呼んでくれ。そして、またナルマダー河で泳ごうではないか。

われと来て遊べや親のない雀 一茶

子どもには“純粋な邪心”があると、わが輩は述べた。今回は“聖なる邪心”について語ろうではないか。わが輩を静寂から疑心に貶めた、あの事実について。